

# 革新的、実験的なステージ

「八戸を再び演劇の街へ」という想いのもと、2012年にスタートした「はちのへ演劇祭」。今回が6回目となり、短編6作品、劇間劇5作品が3月16〜18日に上演された。会場は八戸ポータルミュージアムはっちシアター2。黒い空間に天井から吊り下がったアングラ演劇のポスターが舞台を彩り、これからの観劇を期待せずにはいられなかった。

会場には舞台が4カ所あり、観客が演目の切り替わりと共に椅子を動かし観劇するというスタイルだ。昔のテント芝居のように、場所さえあればどこでも演じてきたアングラ演劇をほつぷつさせるものであり、舞台監督の革新的、実験的な側面を持つ試みが垣間みられた。

## はちのへ演劇祭を見て——佐貫 巧



八戸学院大演劇部が演じた「面接室」の一場面

観客によってそれぞれの視点で観ることができなのが、演劇の醍醐味だが、私は「今、この演目を上演することの意味」と「にじみ出るユーモア」の2点をいつも注目している。今回の演劇祭の上演作品に共通したテーマ

は、「コミュニケーションや世の中について人間が持つ普遍的な欲求や悩み事だと解釈した。身の周りのものが多様化し細分化され、みんながそれぞれ違う問題に悩む時代。恋愛」「友情」「コンプレックス」「死」「ずれ」

「ストレス」「所有欲」など、「生」への実感を求める人間の葛藤。今一度、昔のようなコレクティブな熱量を信じてみたくなる、そんな気持ちにさせてくれた。また、劇間劇におけるコンテンポラリーダンスなど、演劇以外のさまざまなスタイルを試し錯誤してきた表現者たちの挑戦が、実を結び始めていると実感した。一方、芝居に集中できない場面がいくつかあったのは事実である。役者が脚本を血肉化できておらず、自分の言葉になっていないためである。「練習量」「質」に尽きるのではないかとあえてこの場で提言させていたのだ。

今回の収穫は、八戸学院大学演劇部の出演ではないだろうか。旗揚げ公演とは思えない堂々とした演技で観客を魅了した。脚本の質もさることながら、「面接室」をモチーフに、方言を交えた面接官と学生との掛け合いが軽快かつ痛快で、若いエネルギーを感じた。特に部長の長谷川華さんは、劇間劇の一人芝居「水着」にも出演し、全く異なった作風の作品を見事に演じた。八戸の演劇のこれからを担っていく若い世代が、どう育っていくのか楽しみである。

八戸市中心街には、7月に「マチニワ」がオープンし、2年後には「八戸市新美術館」が建設予定だ。芸術文化面で盛り上がるこの地で、失敗を恐れず「新しい概念・先駆的な表現」にどんどん挑戦し生みだしてほしい。はちのへアヴァンギャルドの幕開けだ。

(そめき・たくみ 画家、現代芸術教室アートイース代表、八戸市在住)